



1 作 物

項 目	作 業 内 容
(1)普通期水稲 管理	<p>(今月の作業のポイント)</p> <p>普通期水稲の水管理 普通期水稲の収穫・乾燥・調製 水田雑草の防除 麦の種子更新と種子消毒</p> <p>10 月は、普通期水稲の登熟後期に当たり、光合成能力や稲体の支持力及び 根の活力を維持して登熟を高めるため、間断灌水や浅水管理を行う。さらに成熟期に近づくにつれて徐々に灌水量を少なくするが、土壌が乾燥すると乳白粒や未熟粒の発生で品質が低下するので、必要以上に乾燥させない。</p> <p>落水はできる限り遅くして登熟を高めるようにするが、土壌条件や降雨状態等から総合的に判断する（普通期水稲では7日前が基準）。</p> <p>湿田や排水不良田では溝切りや裏溝上げを行い、灌・排水が容易にできる状態にしておく。</p> <p>また、台風が接近した時は、フェーン現象の乾風による稲の脱水症状（青枯れ症）や倒伏、茎葉損傷などの被害を軽減するためにできる限りの深水にして通過に備える。</p>
(2)普通期水稲 の収穫・乾 燥・調製	<p>刈取り適期の適否が、米の品質・食味を大きく左右する。時期が早過ぎると青米などの未熟粒が多くなり、逆に刈遅れると立毛中の胴割米や茶米の発生が多くなって品質が低下する。</p> <p>刈取り適期を生育中庸な株の最長稈における黄変初率で判断すると、中生種のヒノヒカリ、愛のゆめが 85%、晩生種の松山三井が 85～90%である。また、出穂期後の積算温度では、ヒノカリが 900～1,100 、愛のゆめが 980～1,110 、松山三井が 1,050～1,200 である。登熟速度は主として気温に支配され、気温が高いと成熟期が早くなる。今年の普通期水稲の出穂期はほぼ平年並からやや遅くなっているが、10月の気温は平年並か高いとの予報から、成熟期は平年並～やや早いと思われる。本県の水稲は、やや刈り遅れの傾向にあることが指摘されているため、刈り遅れないようにする。特に、ヒノヒカリは刈り遅れると乳白粒や薄茶粒の混入が、松山三井は胴割粒が多くなるので注意する。</p>

項 目	作 業 内 容
(3)水田雑草の防除	<p>収穫は、乾燥機の処理能力にあわせた計画的な刈取りを行う。籾の長時間堆積は品質低下の原因となるので速やかに乾燥する。</p> <p>また、共同乾燥施設においては処理能力に合わせた計画的な荷受けを行い、台風の被害に遭った倒伏稲や穂発芽籾など品質や水分別仕分けを徹底し、低品質籾が混入しないようにする。</p> <p>なお、乾燥は次の点に留意する。</p> <p>ア乾燥温度は40 以下とする。</p> <p>イ乾減率は毎時0.8%程度とする。</p> <p>ウ玄米の仕上がり水分は14.5%を目標とし、14%以下の過乾燥や15%以上の高水分にならないようにする。</p> <p>エ高水分籾(25%以上)は水分ムラが多いので、通常の通風温度より5 低い温度で乾燥し、水分20%以下になってから通常の熱風温度で乾燥する。</p> <p>オ籾摺りは、機械を水平に設置し、ゴムロール等の消耗部分の交換や事前に調整を行って、玄米の肌ずれや胴割れ米の発生及び玄米への籾混入を防止する。今年の穂数不足の状況等から、普通期米では千粒重がやや大きいと考えられるため、ゴムロールの調整を必ず行う。</p> <p>調製は、高品質米生産における品質管理の最終仕上げという認識のもとに、必ずライスグレ - ダ - を使用し、ふるい目幅の調整や選別作業を入念に行い、整粒歩合80%以上を目標に仕上げる。Sサイズ(1.75mm以下)の篩目では1等に調製するのが難しいので、必ず1.85mm以上の篩目を使用する。</p> <p>近年、手取り除草を行わず除草剤だけに頼る水田雑草防除が増えているため、遅く発生したノビエや除草剤の効きにくい多年生雑草(難防除雑草)が増える傾向にある。</p> <p>ノビエ等の1年生雑草は、放置すると多量の種子を作り、次年度の多発生につながるため、水稲収穫前に穂の抜き取りなどで種子を水田外に持ち出す。地域の広範囲で特定の雑草等が残る場合は、除草剤の変更を検討する。</p> <p>また、地下茎・根などの栄養器官で繁殖する多年生雑草では、水稲収穫後の再生や塊茎形成時の防除が有効である。セリ、キシユウスズメノヒエ、コウキヤガラ等は水稲収穫後の再生を待って雑草生育期(11月上旬)までに、ミズガヤツリ、オモダ</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(4) 麦の種子更新と種子消毒</p>	<p>カ、クログワイは塊茎形成期(10月上旬)にグリホサート剤等をスポット処理する。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p>写真1 クログワイの塊茎 写真2 クログワイの多発田</p> <p>麦の播種適期は11月中～下旬であり、それに備えて種子の準備と種子消毒を行う。</p> <p>麦は自然交雑や変異が起こりやすく、種子更新せずに栽培を続けると数年で雑ばくとなり、収量・品質が低下する。特に実需者から指摘されているカラスノエンドウ種子の混入は、自家採取をした場合に選別が十分にできていないことが一要因となっているため、混入のない種子を2～3年に1度の割合で計画的に購入し、種子更新を行う。</p> <p>また、斑葉病や黒穂病等の種子伝染病害を防除するため種子消毒をしておく。多量に種子消毒する場合は、オートリバース混合機(育苗用土を混和する機械)を用いると便利であり、麦産地のJAではこの機械の貸出しを行っているところもあるので、積極的に活用する。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p>写真3 斑葉病 写真4 黒穂病</p>